二　立誠舎時代

京都での草庵の成長は、故郷の人々にも知られた。帰国して、故郷の若者に教えてほしいと、願う人達が多くなってきた。この願いに応えて、天保十四（一八四三）年六月帰国し、八鹿村の西村庄兵衛（潜堂）の立誠舎を借りて塾を開いた。故郷を出てから十三年目、三十一歳のときである。

八鹿山中漫吟

以下自癸卯至丁未

係立誠舎寓居中作

渓水聲自風外響
山螢光向雨中飛
心閑方愛物閑處
興味従来識者稀

八鹿の山中で漫に吟ず
以下癸卯より丁未に至る
立誠舎寓居中の作に係わる
渓水の声は風外より響き
山螢の光は雨中に向って飛ぶ
心閑かにして方に愛す物閑かなる処を
興味　従来識る者稀なり

漫＝マン　そぞろに　気の向くまま　　山螢＝サンケイ
興味＝キョウミ　物事の趣　面白み

【訳】

八鹿の山中を散歩しながら

以下の漢詩は天保十四年から弘化四年までの
立誠舎に仮住まいをしている時の作

谷川の水の音が外から響いてくる
山の中から蛍が雨の中を飛んでくる
心を静かにして、この静かな自然を楽しんでいる
このような面白みをこれまで知っている人は少ないだろう

甲辰孟春三日漫題

相競相争聲利場
終年役々世多狂
如何病叟山間臥
閑送微風春日長

甲辰孟　春三日漫題
相競い相い争う声利の場
終年役々として世多く狂へり
如何せん病叟は山間に臥す
閑に送られし微風　春日　長し

甲辰＝コウシン　弘化元(一八四四)年　三十一歳　　孟春＝モウシュン　初春、陰暦で春のはじめにあたるとされる正月のこと　　声利＝セイリ　評判と利益　　終年＝シュウネン　一年中　　役々＝エキエキ　辛い仕事などで身心とも苦しむ
叟＝ソウ　オキナ　おきな　老人

【訳】

甲辰（弘化元年）の新年三日の詩

名声や利益を競い争う世間
年がら年中苦しんで世の中多くが狂っている
病がちの老人は山間に身を横たえているだけだ
静かに風が吹いきて春の日は長い

早春偶題

淡煙已起雪消處
碧水始流氷釋時
吟眼入春纔兩日
風光便覺促新詩

早春偶題
淡煙已に起る雪消ゆる処
碧水始めて流る氷釈くる時
吟眼春に入って纔かに両日
風光便ち覚ゆ新詩を促すを

碧水＝へキスイ　青緑をした川の水　釋＝シャク　トケル　纔＝サン　わずかに

【訳】

早春を詠う

淡い煙が雪の消えたところからもう立ち上っている
谷川も氷が溶けて水が流れ出した
新鮮な気持ちの新年になってわずかに二日だが
この景色はたちまち新しい詩を作ることを私に促す

早發湯島到豊岡舟中

両岸曉風吹冷顔
斜支一棹泝秋灣
後舟忽過前舟去
已入水烟冥漠間

早く湯島を発って豊岡に到る舟中
両岸暁　風冷顔に吹く
斜めに一棹を支え秋湾を　泝る
後舟　忽ちにして前舟を過ぎ去り
すでに水　烟冥　漠の間に入る

棹＝トウ　さお　泝＝ソ　サカノボル　水烟＝スイエン　水上のもや
冥漠＝メイバク　遠く遙かなさま

【訳】

早朝に、湯島を発って、豊岡に到る船中にて

川の両岸から早朝の風が顔に吹いてくる
秋の川に竿を刺してさかのぼる

後ろの船がたちまち前の船を抜き去り
水面の霧の中に消え去った

偶題

積雨初収苔色青
下レ樓日夕歩二幽庭一
筇前忽落松間月
帽角斜飛竹裏蛍

偶題

積雨(せきう)初めて収む苔(たいしょく)色の青
樓(ろ)を下り日夕(にっせき)に幽庭(ゆうてい)を歩む
筇(きょうぜん)前に忽ちに落ちる松間の月
帽角(ぼうかく)に斜めに飛ぶ竹裏の蛍

積雨＝セキウ　長雨　　筇＝キョウ　竹の一種

【訳】

ふと目をとめて

長雨で、苔が初めてみどり豊かになった
家の外に出て、一日中静かな庭を歩いている
竹林の月が松林に消えると
眼前を竹林の蛍が斜めに横切った